森のふくろうへの独言 Ⅵ

小田　富英

届くか
わが無音の独言
聴けるか　翁の再生の詩(うた)

若き翁の長旅の疲れを癒やすためか
翁の歌の先導の最後の墓参を労うためか
川舟下りを楽しんだ夏の一時
静かにもしばしつどいて遊ぶかな
隣には亡くなった友の於母影残る弟も乗る
兄の思い出語る言の葉に
あの時の一言が
友との別れとはっとした

きよ滝川が出会う渓谷
船底に響くゴツゴツとした音は
船頭の声と歌が跳ねたからか
静かにもはなんとも無益
ここにしもと直すべきだと
先導の導き
川舟に乗る四人の心も集っていたのだ

その一時からわずかの日々が
先導の残された生であったことも知らず
先導の背中に懐かしい昔の
滅び行った都の景色が見えたと翁は言う
この川舟下りは
生と死の
落合川とその時気づいていたのか

この翁の遊びからひと世紀
川下りの歓声も景色も変わらず
ゴツゴツの音も船頭の明るい歌声も
あいかわらずに
川の流れも同じに見えるが
生と死の落ち合う所と
気づく者は
果たして何人ありや

年刊

第39集
詩集 ふくい 2023

福井県詩人懇話会